平成19年度入学式
学長告辞

お茶の水女子大学、学部入学生のみなさん、ご入学おめでとうございます。みなさんをお茶の水女子大学の新しいメンバーとしてキャンパスにお迎えできることを、たいへん嬉しく思います。

みなさんは念願叶って入学の日を迎えられて、その感激で胸がいっぱいでしょう。この日までの長い年月の間、教育に心を砕かれ、お嬢様方のご成長を見守ってこられたご家族のお喜びもひとしおとお祝い申し上げます。

本学は女子師範学校として１８７５（明治８）年９月に開学いたしました。今から１３２年前のことです。後に、東京女子高等師範学校、通称は女高師と呼ばれておりました。開学当時の設立場所は文京区大塚ではなく湯島、現在の東京医科歯科大学のあるＪＲ御茶ノ水駅の近くでございました。その後、関東大震災による大きな被害を受けまして、現在のこの大塚の土地に新たに校舎を建て、７５年が経ちます。震災の教訓を活かしまして頑丈につくられましたこの講堂は徽音堂と呼ばれ、４年に渡る改修が終わり、昨年、新たに甦りました。この新しい徽音堂で入学生としてのみなさまを今日初めてお迎えすることも嬉しく思います。

お茶の水女子大学の前身である女子師範学校は、日本で最初に設立されました女子に高等教育を行うための機関でした。現在の文部科学大臣に相当する当時の文部卿、木戸孝允によって設立の布達が出されたのが明治７年３月のことです。本学の学外理事である和田昭允先生は木戸孝允卿の曾孫にあたる方でございます。

この講堂がつくられてから５年ぐらい、つまり７０年前にちょっとタイムスリップをしてみたいと思います。ヘレン・ケラーは皆さんご存知かと思います。１８８０年にアメリカで生まれ、視覚、聴覚、言語障害の３重苦を背負いながらも、いろいろな知識を身につけて、著述者や社会福祉事業家として活躍されました。世界の各地で講演活動を行って身体障害者の教育や福祉に多くの貢献を残しました。ヘレン・ケラーは昭和１２（１９３７）年、本学の徽音堂で講演をしました。講演を聴いた在校生が感激したという話も聞いておりますし、当時の写真なども本学に残されています。それがちょうど今から７０年前の４月２６日のことです。ヘレン・ケラーは次のような言葉を残しています。「「知識は力なり」という。しかし、私は「知識は幸福」だと思う」。アメリカ東部の名門女子大学ラドクリフでヘレン・ケラーはあらゆる本に心を開き、じっくりと味わいながら色々なことを学びました。その経験から深く広く知識を持てば、正しい目的と、誤った目的、高尚なことと低俗なこととを識別できるようになるから、「知識は幸福」であると話したのだといわれます。

お茶の水女子大学は、学ぶ意欲のある全ての女性のために、真摯な夢の実現の場として存在することを使命としています。また、あらゆる分野でリーダーを育てることを目標としております。

では、なぜ女子大学なのでしょうか。私はちょうど４９年前、皆さんと同じようにこの大学に新入生として入学しました。４年間の学部教育を受けた後で、共学の大学で学んだり教えたり研究をした後、２年前に本学に戻ってまいりました。そして、女子だけで、ある時期に教育を受けて切磋琢磨することが、リーダーシップを育てるうえで一番よいことであると確信するようになりました。

女子大学では女性同士がお互いに切磋琢磨して、成長していけることがよいことです。さらに、お茶の水女子大学の場合は、少人数教育で先生方の目が一人ひとりに行き届きます。しかも、徹底的に鍛えられます。基礎教育を重視していますから、違う専門分野に移ったとしても、応用が利くなどの実力が身についています。女性だけで、少人数で、しかも、基礎教育を重視するという３つの点がお茶の水女子大学の存在をアピールできるポイントです。

世の中の色々な分野で、活躍できる女性リーダーを育てるための最適な環境条件が整っていると思います。本学の卒業生は社会の色々な場で指導的な立場で活躍しています。特に研究職、教育職について活躍された方々は全国の隅々まで行き渡っています。優れた女性リーダーを育む校訓と伝統は現在まで絶えることなく続いております。

現在、８７の国立大学法人のなかで本学と奈良女子大学の２つが女子大学として存在しております。私学にも多くの女子大学が存在しています。一方、アメリカの東部には名門の女子大学があります。かつてはセブン・シスターズと呼ばれた７つの名門女子大学がありました。しかし、ヴァッサー・カレッジが共学になり、ラドクリフ・カレッジも学生がハーバードの学生を兼ねるようになって、事実上共学になり、現在はファイブ・シスターズとなった女子大学が、全寮制の少人数教育を守りながら、今も、入学時の高い競争率のもと、優れた女性を世に送り出しています。

アメリカで、初の女性大統領候補となる可能性がささやかれているヒラリー・ロダム・クリントン上院議員は知事夫人でありながら「全米１００人の弁護士」に選ばれております。傑出した秀才であることは間違いありません。

ヒラリーはファイブ・シスターズのひとつであるウェルズリーカレッジの出身であり、女性の仲間といることが多かったのです。ウェルズリーでは寄宿舎生活を通して、一生続く友人を得ました。女子大学はリーダーシップを発揮するのには最高の環境でした。共学であれば男子生徒に譲ったかもしれない様々な役割を、自分たちで独占できたのです。ヒラリーがウェルズリーで過ごした１９６０年代、特に、この後半はベトナム反戦運動が高まりを見せていました。卒業式にはウェルズリー初の卒業スピーチをヒラリーがすることになります。ヒラリーはアメリカの古き良き価値観が崩れていく不安、ベトナム戦争への不安、自分たちの将来への不安を感じながらも情熱的な生き方を望んでいく気持ちを率直に卒業スピーチに込めました。スピーチは熱狂的な拍手をもって聴衆に称えられました。ヒラリーのもとには取材が殺到しました。総代として、全米に知れ渡る卒業スピーチになりました。

これらは、岸本裕紀子さんが書かれた新書『ヒラリーとライス　アメリカを動かす女たちの素顔』に詳しく描かれています。

(次ページへ)

平成19年度入学式
学長告辞

平成19年度入学式
学長告辞

（前ページより）

お茶の水女子大学は国立大学として法人化後３年を経て、今、大きく変わろうとしています。教育、研究、そして社会への貢献に改革を進めております。文字どおり日々躍進しております。今年度は特に学生のみなさんのために学内の設備など改善していく、そのための予算をつけておりますので、みなさまが入学されてから色々なところが良くなっていくと思います。食堂なども拡張してまいります。また、皆さんへの一番大事な教育について申し上げますと、文系・理系ともに新しい融合領域への展開、研究者養成とともに社会のさまざまな分野におよぶキャリア教育を一層充実させております。この４月から始まる科目「お茶の水女子大学論」は、今年から新たに設けた科目です。学部を超えて、大学全体で協力して運営いたします。お茶の水女子大学はどういう大学なのか、大学生活を有意義に過ごすためには何をすべきか、先生方、本学の卒業生、先輩と一緒にこの徽音堂で考えていきましょう。

来年、２００８年度から新たに２１世紀型リベラルアーツ教育を学部段階で開始いたします。今年は、その序章として新たな科目など文系や理系といった枠を超えて広く人間性を養い、社会の変化、２１世紀のグローバル時代を生きるための「知」を身につけるための講義がスタートします。少子高齢化の時代に子育て、家族との生活を充実させながら大学で学び、英知を磨いた女性が生涯を通して個としての自己を確立し、また、社会への参加を貫いていくことの大切さを身につけていただきたいと思います。

４年後に卒業生としてこの徽音堂から巣立っていくみなさん、４年間に何を学ぶことができ、そして人間としてどのように成長したのか、ヒラリーがウェルズリーの卒業式でおこなったスピーチのように、自分の内面と社会に開かれた眼差しを、情熱を持ってどのように表現していけるか今から考えておいてください。

ご入学おめでとうございます。

平成19年度大学院入学式
学長告辞

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士前期課程と後期課程の入学生のみなさん、ご入学おめでとうございます。みなさんをお茶の水女子大学の新しいメンバーとして、このキャンパスにお迎えできることをたいへん嬉しく思っております。国旗が並んでおりますが、世界９カ国から４１名の留学生のみなさん、お茶の水女子大学はみなさんの大学院入学を心から歓迎いたします。みなさんは今日から大学院生として専門分野の探求に日夜励まれることになります。

本学はこの４月、大きな変化を迎えました。大学院の名称が変わりまして、人間文化研究科から「創成科学」が加わりまして、「人間文化創成科学研究科」となりました。専攻も新たに編成されまして、本学の教員のほとんど全てが大学院に所属する、そういった大きな改組をいたしました。この大きな変革の最初の年に、みなさんは本学大学院生として入学されたわけでございます。

２１世紀は男女共同参画の時代でございます。我が国は約４０年余り経済において飛躍的な発展を遂げました。そして、世界のトップグループの仲間に入りました。しかし、残念なことに先進国のなかでは女性研究者の占める割合は非常に低い値となっています。２００６年度の日本では１１．９％です。アメリカでは３２．５％、フランスでは２７．５％でございますから、日本の１１．９％というのは、この４年間で４％増えておりますが、先進国のなかでは低い値でございます。昨年度から第３期科学技術基本計画が開始されました。そのなかには、５年間で自然科学分野の女性研究者の割合を２５％に増やすといったことが書かれております。本学の女性教員の割合は４０％で、国立大学のなかでは最大の比率です。しかし、これを５０％にするため、努力を続けている次第です。

一方、国立大学協会では２００１年から２０１０年までの間に、国立大学の女性教員の割合を２０％とする数値目標を掲げました。本学は４０％ですので、その目標に十分に達しているのですけれども、いまの女性教員の割合は、８７の大学と２つの短期大学でアンケートをおこなった２００５年の調査の結果なのですが、９．３％というかなり低い値です。いま申し上げた話題は助教と非常勤講師は抜いた数値でございます。その５年前は６．６％ですから、５年間で２．７％増えたわけですが、２０１０年までに目標値の２０％に到達することは困難であるといわざるを得ない状況でございます。多くの国立大学で飛躍的な改善が図られることが必要です。私が申し上げているのは皆さんをエンカレッジするためでございます。このように低い値があるから女性の優秀な教員の方達が存在すれば、どの国立大学も採用したいと思い、これはみなさんにとって大きなチャンスです。

大学院に在籍される間、大切なことは指導教員、師との出会いです。人生において師との出会いが人生の指針となることはよく言われることですが、特に研究者として研鑽の道を歩む者には身近な指導者を見習うことが多いと思います。本学は教員の４０％が女性ですので、子育てをしながら、あるいは両親を介護しながら大学で教え、研究している女性の教員もたくさんおります。そういう先生方がおられるところですから、みなさんにとってはこんなにいい研鑽の場所はございません。お手本がたくさんあるというということは、他の国立大学ではほとんどみられない本学の大きな特徴でございます。

本学は２１世紀の社会で活躍する女性リーダーを養成することを目標としております。新しい科学技術分野や環境問題など、狭い学問分野に閉じこもっていては解決できない多くの問題が、地球上に住む人類の共通の課題となっています。女性が学問分野を横断する新しい分野、あるいは社会にまだ確立していない領域に進出し、能力を発揮していくことが必要であり、大切なことであると考えております。本学は文部科学省のご支援によりまして、「女性研究者に適合した雇用環境モデルの構築」というお茶の水女子大学独自のワークライフバランスを推進するプログラムを実施中です。ワークライフバランスとは仕事も家庭も調和の取れた生活を送る、そういったプログラムを推進するということでございます。子育て中の女性研究者にどのような雇用環境を整えれば仕事の能率を上げて充実した勤務を終え、一人ひとりのプライベートな生活の充実を実現させることができるか、これを５人の子育て中の女性研究者を対象に、実験的な試みを行っております。通称「９時－５時」プログラムといいますが、本学全体として実施できる体制を整えつつあります。このプログラムはいろいろなマスコミからも取材・報道されておりますので、すでにお気付きかもしれません。みなさまにもこのようなプログラムを身近なところでぜひ注目していただき、将来の参考にしていただきたいと思います。

女性の研究者が持てる力を発揮するためのプログラムは、大学院生として研究生活を開始するみなさんにとっても、将来のキャリア設計にとって大変に重要な事業と思っております。

本学の恵まれた研究環境のなかで日本の女性研究者の道を切り開くその代表としての活躍を願っております。本学の教員や事務の職員も温かく皆さんを応援しております。

（抜粋）